



キャンパス・コラム

俗悪な文体と心

いつ頃か、それが郵便局の民営化に異常なこだわりを見せる総理が誕生した頃だったか、あるいは東京の首長が品位を欠く口調で人を恫喝するようになってからか定かではない。ともかく、この二人の為政者が登場して以来、キャンパスの雰囲気は気忙しく、直線的な思考で支配され、若者の心も性急になったような気がしてならない。学問の府が政治に左右されるはずがない、という反論もあろう。社会全体が右傾化していると危惧する人もいる。だが政治はあくまでも表層的な現象に過ぎない。そうではなくて、俗悪な文体を真似ているうちに、人間関係や考え方が俗悪になってしまったのではなかろうか。

たとえば教室で差別について話す。プツと

いう冷笑とともに鼻白む空気が満ち溢れ、「ウゼー」、「ダリー」の声ですべてが終わる。あたかも「ババア」と罵って、他人の話聞く耳を持たない小説家のごとくである。レポートには「食った」、「暑かった」の文字列が踊る。「ぶっ壊す」、「感動した」と言って突如会見を打ち切り、靖国を強行するスタイルが学生にまで伝染したのだろうか。言葉が貧すれば精神までが鈍するのである。

大学はプラクティカルな技術を伝授する程度には用を為せばいいという議論もある。しかし、かつて「知」というタームが流行語となってキャンパスを鮮やかに彩り、私たちは饒舌に、そして真剣に語り合ったはずである。更にその十年前には、神谷美恵子の『こころの旅』がベストセラーになった、のどかな時代がある。あれは何だったのか。大学の復権を願うには、ボキャブラリの再構築が必要だと考えるのは私だけはあるまい。

広報委員 福井千春（経済学部教授）